



naMida ka ni

no

Moon Light cheer

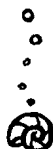
なみだ蟹の
ムーン・ライト・チアーズ

玉岡かおる

新潮社

なみだ^か蟹のムーンライト・チアーズ

たまおか
玉岡かおる



印刷——1990年10月10日

発行——1990年10月15日

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71 ■振替・東京4-808

電話——業務部03-266-5111

編集部03-266-5411

印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

© Kaoru Tamaoka 1990, Printed in Japan

ISBN4-10-373702-6 C0093

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。



◎ 目次

なみだ蟹のムーンライト・チアーズ

5

鏡の森で 月夜の晩に

113

裝畫●邊見由実子

なみだ蟹のムーンライト・チアーズ

なみだ蟹のムーンライト・チアーズ

夏、七月の暑い盛りに生まれた子には、燃えたつ夏の生命にあやかって、まっ赤な蟹を体に這わす。

遠い南の島に伝わる誕生の儀式を教えてくれたのは祖母だった。

「だからセンリ、あんたが生まれた時にも、まっ赤なしおまねきを、その白いお腹の上に載っけたんだよ」

祖母の話してくれた儀式の光景は、主体の赤ん坊が私自身であつたことなど忘れさせ、赤ん坊を見守る人々の一人でもあつたかのように鮮明に、私の頭に映しだされた。

たっぷり乳を与えられ、みたされた赤ん坊は、うぶ着を解かれ、柔らかに肥えた四肢を自由自在に動かしている。ふいに腹の上に置かれた蟹の重みにも驚かず、機嫌のいい喃語をあげている。蟹は赤ん坊の腹の上で、自分の置かれた高さを測り、どちらに進むか思案しているようにじっとしている。やがてまっ赤な蟹は、奇怪な八本の脚をうごめかせ、床の低みの方へとゆっくり移動を開始した。

そんな情景の一つ一つを、私は実にこと細かく思い描くことができた。そして、私の想像の中で蟹は、赤ん坊の生まれたばかりのみずみずしい皮膚細胞の上をまっすぐ横断していき、赤ん坊のつぶらな瞳は、ただ無心に何かを見ようとしているのだった。

きつと、そんな風景が心の中に棲みついていたせいだろう。

「私は蟹よ」

生まれた星座を聞かれたときに、ぼんと言いついてしまった。正確には蟹座の生まれよ、と答えるべきだった。

「誕生石なら、ルビー。まっ赤な、ルビーよ」

そしてそれも蛇足だった。彼はそんなことを聞いてはいなかったし、知る必要もなかっただろう。

でも、彼は鷹揚な人だった。

「そうか、ルビーか。高^{たか}えなあ」

ひとり納得して、考えこんでいた。私は自分の蛇足にあわてながらも、彼の隣にいられる充足を味わっていた。

蟹座の見えない真夏の空に、ぼとりと音をたてて落ちてきそうな大きな星が、重そうに輝いている夜だった。

2

潮と私は、一匹の蟹を共有していた。

最初に彼に会った夏、私も彼も、まだ十二歳の子供にすぎなかった日のことだ。

片方のハサミを失なつて、海からはるか遠いアスファルトの道の上にはいつくばっていた、まっ赤な蟹。それがあの日の私たちには、一番大切なものだった。

蟹は遠く家島の方角に沈んでいった夕陽よりも赤く、ひそやかに光る石よりかたく、私の手の中でじつとしていた。

その蟹を、海へ帰してやりたくて、うしおの後を追いかけた。海まで、遠い道のりだった。人間の足でも遠いその距離を、海にそむいて歩いてきた蟹に、私たちは感服した。もの言わぬ小さな生命は威厳にみち、ふたりは歩かずにはいられなかった。

私たちのほるか前方、東の空で、月ははちきれそうに満ちて輝き、その明るさは星をちりばめたぬばたまの夜空を、一気に紺青へと塗りがえてしまひそうに明るかった。夜のものであるはずの月がこんなに明るいことを、それまで私は知らなかった。

傍に腰をおろしたうしおの輪郭がくっきり白く、そして乾いた砂地に落ちた私の影が鮮やかだった。

まっすぐ灯台へと延びる防波堤のつけ根には、人工の匂いを漂わす松の樹が枝をしならせ、無

造作に積まれたテトラポッドに、海がたゆたっている。なまぬるい風がはたと吹きすぎ、ほんのわずか先にある猫の額ほどの砂浜では、寄せる波がゆっくりとした間隔で鬨の声を上げる。

そして蟹は、月明かりの砂浜を、まっ赤なハサミをふりかざして去っていった。

今でも時々思い出す。あの蟹は、海へ帰っていったのだろうか。それともふたたび水際遠く、人間の暮らしにみちた内陸ふかくにまいもどって行ったのだろうか、と。

波の音が聞こえない。けれども波打際をくすぐって、そしてあわててころがり逃げていく、瀬戸内の海辺が見える。

それはたぶん、神戸の街育ちの私が出会った、最初の海だ。

だからこそ今でもこんなに鮮やかに、あの月夜の風景を思い出すことができるのだ。

あの頃の私は、名門と呼ばれるある私立の女子中学を受験することになって、小学六年生の女の子が持てる時間の百二十パーセントちかくを、机の前で過ごしていた。そのままエスカレーター式に大学まで進んで、そこも卒業してしまっただけとなつては、一度と真似のできないような日々だと思う。けれども当時の私は、他の生活というものを知らなかったし、塾や家庭教師、片づけても片づけても減らない宿題や問題集といったものは、本当のところ、たいして苦ではなかったのだ。

それでも父は、やせっぽちの私がろくに陽に当たりもせず、ますますやせて青白くなつていくのをひどく気に病んで、夏休みの一週間を、死んだ母の実家に遊びにいくよう、手はずを整えてくれたのだった。

かつて広大な塩田を有し、製塩業で栄えた母の実家・喜嶋家は、平屋造りのそのどっしりとし

た家そのものが、往時の繁盛ぶりを物語っているようでもあった。しかし塩田自体が用をなさなくなり、浜が埋め立てられて大工場が進出してくると、喜嶋家もさびれた。今は祖母が近所の娘さんを相手にほそぼそと茶道を教えながら、いたずらに広いこの家を守っているにすぎなかった。「いま、冷たいものでも入れてあげようね」

祖母は私を待たせて、奥へ退いた。まだ客扱いの私が通されたのは、八畳の和室に緞通の絨緞を敷き、その上に応接セットの置いてある、和洋折衷のふしぎな応接間だった。唐木の飾り棚には、いわくありげな青磁の置き物があり、床には涼やかな鮎を描いた軸が掛けられ、とびきり鮮やかな黄色の風鎮がぶら下がっていた、というようなことを、私はとてもよくおぼえている。ロードショーの始まる前の予告篇を、むやみとよくおぼえているようなものだ。

ちりりん、と南部鉄の風鈴の音がした。

そして、眺めに入る何もかもがまだものめずらしい私の前に、うしおは大胆に出現したのだった。

縁側ぞいのガラス戸を開け放って、簾一枚で庭に接した応接間からは、ふいに塀の植え込みの中から立ち上がった人影を、はつきり見てとることができた。がさがさと、大股な足どりで、葉蘭やシダの茂みをまたぐようにして、その人影は敷石のところまでやってきた。

それは、赤いランニングに明るい青のジョギングパンツをはいた少年だった。

目と目が合った。彼の衣服には、低いつつじの植え込みをかきわけてきた証拠の小さな葉や枯れた花びらの屑がまわりついていて、しかも彼の手や足は泥だらけだった。

ほんのわずかの凝視のあとで、彼は泥だらけの左手を私のほうへ差し出してみせた。

彼の手の中にある泥のかたまりが動いている。しかしよく見ると、泥のかたまりと思っただけ

彼の手で、實際彼の手の中にある動くものは、鮮やかなほどに赤かった。

蟹だった。まっ赤なハサミをふりあげてもがいている蟹だった。

私はその蟹に、目をみはった。

「これッ。いい年してまた蟹なんかつかまえて。家の中に持つてはいったら、承知せえへんよ」
いつのまに來たのか、ジュースのグラスを載せたお盆を運んで、祖母が背後で声を荒らげていた。

庭の少年は首をすくめるとあわてて走りだし、庭の隅の土蔵のほうへと横切つていつてしまった。

ちりりん、と、また風鈴が鳴った。

「あの子、だれ……？」

ストリートに尋ねるのは憚られたが、それは何より私の知りたい関心事だった。

祖母はちよつとためらつてから、

「うしお、つていうんよ」

ぼつんと言った。

それが、彼の名前を聞いた最初だった。

「あの子、おばあちゃんの家の子？」

おそるおそるに尋ねたのを思いだす。

私がずっと小さかった頃、何度も祖母に連れられてここへは來たけれど、確かあんな子はいなかった。土蔵に続く広々とした空地には、あってもなくても同じような、すっかり崩れた塀をこえて近所の子供たちが集まつてきて、よくソフトボールをしていた。だがそれは厳密には「よそ

の子」であるはずだった。あの中に、「この家の子」が混じっていたなどとは思ひもしなかった。思えるはずもない。私と同じ年恰好の子供を生める女というものの自体、この家には存在しないからだ。

でも、

「そや。おばあちゃんとこの子オや」

あっさりと祖母は言い切ったのだった。

それは私の知りたいことに對する答えにはなっていなかったが、祖母がそれ以上話しだしそうにないので、その場はうやむやになってしまった。

意図的な沈黙が、祖母と私の間にふさがっていた。子供心にも、それをなんとかしなければと焦り、何でもいい、その沈黙をぬけていく通路を作る話題を私は探した。

それは簡単にみつかった。蟹だった。

相手が蟹なら、祖母もすぐに応じてくれた。

「蟹なんか——どこにでもおるよ。そら、うちとこの庭にも」

あたりまえ、といったような顔で、祖母は答えた。

「あんたのお母ちゃんも、ようこの庭で、蟹をみつめて遊んどったわ。笹の葉を、蟹のハサミにはさませて、蟹を釣った、釣った、言うて——」

ちらりと、祖母の哀しみがのぞいた。けれど私には、自分と同じ子供の姿をした母を想像するよりは、さつきうしおが捕まえた蟹を思い描くほうが、ずっと容易だった。

蟹の来る庭。それは、どれだけ私を喜ばせたことだろう。うしおそのものの正体は、依然まったくわかってはいなかったが、とりあえず蟹のことがわかって、私は満足していたといつてよい。

けれどそれからの日々、私は実のところ一匹の蟹も捕まえられなかった。毎日、朝食の後には必ず庭に出て、土の上に目を凝らすのに、どんな蟹にも遭遇できない。

一方、うしおは、さまざま大きな蟹を捕まえてきた。裏庭の水道口に、よく空き缶だのバケツだのが置きざりにされていて、何の気なしにのぞくと、たいていどれにも、何匹ずつかの蟹がいた。

彼と私は同い年。正確には、私のほうが二か月ばかり、年上になる。でも、本当は、うちとけて親しくなれる存在でありながら、私とうしおは口をきいたことがなかった。私には、彼に話しかけるような特別な話題がなく、それはうしおのほうでも、たぶん同じことだったろう。

広さだけはじゅうぶんな邸の中を、彼は神出鬼没、いるのかいないのかわからないような暮らしをしていた。

「ネコといっしょや。いっつもウロウロ出歩いて、ゴハンるときと寝るときだけ、帰ってくるねんから」

祖母はもうとつくにあきらめをつけたように言いながら、

「宿題ちゃんとやっとなのかいな。また三十一日の晩に、懐中電灯で照らして庭の絵かいたりするのんはやめといてや」

「渡り廊下の電球が切れとるのん、まだつけかえてくれてへんやないの。おばあちゃん、背が屈けへんのやから、たのむで」

小言を言うのは怠らない。

寡黙なのもともとの性格なのか、うしおは黙って聞いていた。しかしその間食事の箸は休んではおらず、アツというまにご飯を三杯おかわりすると、